

刑死百年に思うこと

山泉 進

本日は、全国から大逆事件にゆかりのある方がお見えです。やっぱり大逆事件と云いますと、秋水が首謀者とされていますが、あれはあの時点での日本の改革運動の中心にいた秋水を政府が殺してしまったわけです。一応、裁判ということになっていますが、これは裁判としては滅茶苦茶な裁判でありまして、秋水は1910年6月1日につかまっていますが、処刑されるのが1911年1月24日ですので、わずか7か月しかありません。この間、実際の公判となる審議はわずか16日、証人は一人も呼ばれていません。冤罪事件ででっち上げというのは、その通りなのですが、それ以上にこれは政治的な虐殺なのです。明らかな思想弾圧なのですが、その当時は思想そのものを取り締まる「治安維持法」はまだ制定されていませんので、大逆罪や不敬罪といった刑事事件にされたのだと思います。

戦後、この二つの罪は刑法から除かれますが、大逆事件に関しても熱心に研究が行われます。糸屋寿雄さん、神崎清さん、塩田庄兵衛さんなどが優れた研究を残されています。1960年には、後に高知市長になられた坂本昭さんを事務局長として「大逆事件の真相を明らかにする会」が結成され、1961年に中村におられた坂本清馬さんと森近運平の遺族が無実を訴えて再審請求の裁判を起しました。しかし残念ながら、この裁判は棄却となりましたので、法律上、秋水たちは有罪のままです。有罪か無罪かというのは重要なことではあるのですが、ただ、私はよく引き合いに出すのですが、同じように刑死した吉田松陰が有罪か無罪かを問いかける人がいるだろうかということです。松陰の場合は、渡航禁止の時代に渡航を企てたのですから、明らかに有罪です。しかし、現代の人々は犯罪者だからといって松陰を嫌うことはありません。松陰の偉大さを損なうものではないのです。

裁判の棄却を受けて、その後の運動は、市民的な復権に重きをおくようになります。幸徳秋水全集が出版され、多くの評伝が出されます。90年代には、事件に連座した3人の仏教徒の復権がなされました。そして2000年、中村市議会において、また2001年、新宮市議会において関係者の名誉回復が決議されました。その流れのうえに、今日の市長が実行委員長を務める記念事業があるのだと思います。

百年ということを想う時、大逆事件の問題は、事件に関わった可哀想な人々の名誉回復を図るという面もありますが、もっと本質的に、すぐれた自由思想をもった人々を政治権力が殺してしまうということは現代でも起こり得ることですので、人権感覚をどう持つかということが大切なのではないかと思います。気の毒な人々と彼らを見るのではなくて、我々自身が、弾圧に立ち向かった彼らの勇気をもって、この百年後の現代に立ち向かっていかなければならないと思います。